高校生の取り組み

9月22日、高校生平和大使と仲間7人が来館。被爆二世川去さんの話を聞き、平和大使の高野求さん(北星女子高)が一万人署名活動など紹介し、當麻さん(龍谷学園高)がジュネーブの国連軍縮部に署名を届け英語でスピーチしたことを報告。被爆者の思いを受け継ぐという高校生たちの熱い気持が伝わってきました。



高校でも、札幌手稲高校、札幌厚別高校、東海大札幌高校、札幌日大高校などは、毎年のように被爆者を招いて生徒に話を聞かせています。

さらに今年は被爆者以外のセンターのメンバーが高校生に話す例もありました。札幌南高校では修学旅行の事前学習で、奥尻高校では特別授業をオンラインで、話を聞きました。被爆者の願いを私たちはどう受け止めていくかという問題提起でした。



（8月以降会館を訪れた諸団体） 生活クラブ生協、札幌市インターンシップ学生、NPO法人シーズネット百聞会、JR北海道労組、新婦人白石支部、高校生平和大使、雇用支援機構労組、東川下小、江別原水協

北星学園が研究会を開催

ヒバクシャ会館の譲渡先となった学校法人北星学園。

既報の通り、7月には「北星学」を学ぶ女子中高の生徒6名が会館を訪ね、学習を重ねていきました。

10月13日に、北星学園キリスト教センターが、北大の小山亮先生を招いて「北海道から考える平和博物館の現在」のテーマで研究会を実施、オンラインも含めて約50名が参加しました。小山先生は昨年3月まで広島の平和記念資料館の学芸員でした。全国の平和博物館の現状を詳しく紹介する中で、ノーモア・ヒバクシャ会館の課題も示唆されました。

北星学園大学の会場に参加した被爆者連絡センターの宮本須美子さんは、「北星学園が一歩を踏み出してくれて大変うれしい」と感想を語っています。

「妖怪百歌物語～地獄篇～」を観劇して

一九四五年、長崎　賛助会員　奥井登代

妖怪大緑会の第九怪（回）公演、妖怪から見た人間社会を描くというこの劇団の公演を見るのは初めてでどのような劇なのだろうかと思いながら席に着きました。



にぎやかなバンドの演奏と歌から音楽劇が始まりました。物語の中でそれぞれの場面を歌った曲が演奏されます。戦時下の長崎を舞台に、画家を目指す青年と彼に思いを寄せる少女が中心に描かれます。青年はふたりがデート中、特高に逮捕されるなど戦時中の長崎の人々の厳しい生活、日本兵の戦場での悲惨な状況、1945年8月9日の原爆投下の長崎の惨劇が描かれ、戦後家族を原爆で奪われ自らも被爆した少女と、戦場からやっとの思いで帰国した青年は結ばれ、過去を乗り越え、希望をもって生きていきますが、女性は原爆症で命を奪われます。

生前、女性は「絵を描いて」と懇願、「何を」と聞くと「ぜんぶ」と答えます。画家を目指した男性は亡くなった女性との約束を果たし大きな絵を描くのです。

その絵は私たちが忘れてはならない過去のあやまちを描いた平和への思いでした。歌を作曲したモノノケユースケさんは「平和のために音楽や演劇ができることは過去のことを過去のものにせず、今に繋いでいくこと」と書いていました。

